入選　（低学年の部）

福島からのうれしくてせつないおくり物

福岡県　糸島市立波多江小学校　三年
菅井（すがい）　さゆり

「ピンポ～ン」荷物がとどいた。母が私たちにほほえんだ。そんな時は、決まって、妹とむがむちゅうでダンボールを開ける。

「キャー、じいやからのおくり物だ。あっ、私の大すきなおかしや、ＣＭでやっていたものも入っているよ。」

と、私と妹は大はしゃぎ。これは、私が生まれる前から、長い間、わが家に届く祖父母からのあい情たっ急便だ。ダンボールの中には、おかしや絵本などがぎゅうぎゅうに入っていて、一番上にはお手紙も入っている。

しかし、うれしい気持ちと同じ位、せつない気持ちにもなる。

そのわけは、原発事故前は、心をこめて作った野さいやお米、祖父のしゅみの魚つりや、山歩きでとった魚やきのこなどが、ぎゅうぎゅうに入っていたからだ。私は、きせつをかんじられるおくり物が楽しみだった。

「この野さいをたべて、大きくなるんだぞ。」

「とってもおいしかったよ。ありがとう。」

「みんなのその言葉が何よりうれしいなぁ～。明日もがんばって、おいしい野さいを作るぞ。」

と言う、祖父の声はいつもほこらし気だった。

しかし、こんな会話や祖父のしゅみも出来なくなってしまった。しんさいがあった秋、

「今年はおいしいお米が送れなくてごめんね。」

と祖母からの手紙に、

「ばあやたちが一番つらいのに、私たちの事まで気にかけてくれて、ありがたいね。」

と言って、なみだをふいた母を見た時、私ははじめて気づいた。それは、私たちはいつも祖父母のやさしさにつつまれていたという事を。

原発事故により、たくさんかわってしまったけれど、どんな事があってもかわらない物があった。それは、家族のきずな。遠くて会えなくても電話の声だけで、私のどんな気もちも分かってくれる。私が楽しい時は、いっしょにわらってくれる。かなしい時は、そっとはげましてくれる。そんな祖父母が、私は大すきだ。だから、いつまでも長生きしてほしい。

でも、いつかはきてしまう、おわかれの日。その日に後かいしない様に、ありがとうを伝えたい。伝えたいありがとうは、私の体中からあふれていて、何回言っても足りない。

だから、私は思った。祖父母からうけついだいのちと時間を大切にして、ゆめに向かって一生けんめいに、生きていきたい。そんな私の未来をいつまでも見守っていてほしい。だから、体には気をつけて、元気でいてほしい。こう思ったのも、じいや、ばあやが私に、たっぷりのやさしさをくれたからだよ。私もそんな大人になっていくからね。

私の大すきなおじいちゃん、おばあちゃん、心からありがとう。